

<現代社会に「いのち」の意味を求めて> —生きづらさを考える—

「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。
わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしの軛を負い、わたしに学びなさい。・・・」

(マタイ 11:28、29)

現代社会では、多くの人々が大きな声、強い主張に踊らされ流されたりして、職場や学校、家庭でも生き辛さを 感じています。一見、平穩無事の日常生活の中で、他者に無関心になって孤立したり孤独にさいなまれていないでしょうか。効率重視のもとで貧しさの為に虐げられたり、学ぶチャンスを失っている子どもたち、身体的、知的 ハンディキャップによって、働く場所や居場所を得られない人達、介護離職する人達などが、社会の周辺に追いやられてしまい孤独死も増加しています。人々の悲しみや苦しみに光を見出すために、を考え企画しました。



日程	講演タイトル	講師
9月28日	対立を超えて—排斥ではなく共に歩むために— ポピュリズムは世界的な問題ですが、一方で現代の政治や社会の在り方への問題提起でもあります。何が問われているのか一緒に考えてみましょう。	大木 聡 (真生会館館長)
10月12日	子どもたちに寄り添う—自分らしく生きるために— 偏見や貧しさのために居場所を持たない子どもたちがいます。子どもたちに寄り添い、学習支援や居場所づくりなどのサポート活動の現場からの声を聞きます。	鈴木 健 (川崎市ふれあい館・ 桜本子ども文化センター職員)
11月9日	<共に生きる原理の二者性について> どのような人も頼られるのみ、或いは頼るのみの存在はない。現在やまゆり事件の植松青年に毎月1回手紙を書いている。(神奈川新聞に連載中)	最首 悟 (和光大学名誉教授)
11月16日	<「生きづらさ」に向き合おうとすること、の現場から> つきつけられている「生きづらさ」に向き合うことを避けてきた社会が、現在(いま)、その本質を問われている。	明石 紀久男 (NPO 法人遊悠楽舎代表理事)
11月30日	<介護離職のリアル> 介護現場の実態、課題から、介護離職ゼロは目指せるのか?	結城 康博 (淑徳大学教授)
12月7日	<少年事件の背景にあった虐待と貧困> 川口市 祖父母強殺事件から見たこと	山寺 香 (毎日新聞記者)

お申込・お問合せ

一般財団法人真生会館

〒160-0016 東京都新宿区信濃町33番地4

Tel 03-3351-7121・Fax 03-3358-9700

E-mail gakushu@catholic-shinseikaikan.or.jp

URL <http://www.catholic-shinseikaikan.or.jp>

受講料：一回毎¥1,000 学生、学生証提示にて無料

お申込：氏名・連絡先・参加日時を明記して下さい。

お名前

TEL

連絡先 〒

参加希望日

＊講師プロフィール＊

大木 聡（真生会館館長）

山梨大学大学院修士課程で電気工学を専攻し、IT企業で勤務しソフトウェア作成やシステム開発にあった。10年間のSE生活の後、上智大学神学部にて社会人入学して神学を学ぶ。上智大学に在学中は、真生会館「ワカゲ」スタッフとして働いた。上智大学大学院神学部博士前期課程を終了後に、横浜教区事務局で職員として勤務した。2016年に真生会館の館長となる。これまでに様々な教会活動に携わり、カトリック青年連絡協議会事務局長、カトリック社会問題研究所代表幹事などを務める。

鈴木 健（川崎市ふれあい館・桜本こども文化センター職員）

高校生・大学生の時にカトリック横浜教区学生連盟(学連)の活動に参加する。フィリピンの人々交流を深め、「カトリック横浜教区対日外国人と連帯する会」での勤務を経て、フィリピン人コミュニティー「カラカサン」の支援などを行う。現在は「川崎市ふれあい館・桜本こども文化センター」の職員として子どもたちと働きながら、『多文化共生』『居場所作り』を目指して地域に出ていき子どもや若者たちに向き合っている。音楽祭「桜本フェス」や子ども食堂を企画・運営したり、川崎定時制高校内で毎週金曜夜に居場所&学習支援の「ぽちっとカフェ」をひらいたりしている。

最首 悟（和光大学名誉教授）

1936年、福島県生まれ、千葉県にて育つ。東京大学理学系大学院博士課程中退。東京大学教養部助手をへて、予備校講師・和光大学教授を歴任、現在和光大学名誉教授。第一次不知火海総合学術調査団に参加、第二次調査団 団長。「障害児を普通学級へ・全国連絡会」世話人。主な著書に『生あるものは皆この海に染まり』新曜社、1984年『水俣の海底から』京都・水俣病を告発する会、1991年『星子が居る一言もなく語りかける重複障害者の娘との20年』世織書房、1998年『「瘡」という病いかの—水俣誌々・パート2』どうぶつ社、『新・明日もまた今日のごとく』（単行本 - 2018/7/9）

明石 紀久男（NPO法人遊悠楽舎代表理事／一般社団法人インクルージョンネットかながわ代表理事）

NPO法人遊悠楽舎は、2001年から逗子で不登校・ひきこもりの子ども・若者やその家族への支援を続けている。一般社団法人インクルージョンネットかながわは、2015年度鎌倉市から生活困窮者自立相談支援事業を受託し「インクル相談室・鎌倉」を開設。主任相談員を務めている。同年度、藤沢市生活困窮者自立支援・就労準備事業も社会福祉法人いきいき福祉会との共同事業体で受託している。2016年度からは鎌倉市から生活困窮者学習支援事業も受託。「Spaceぷらっと大船」を開設し、子どもたちの学習支援・居場所と同時に食事の提供（みんなでごはん）も行っている。

結城 康博（淑徳大学教授）

1969年生まれ。淑徳大学社会福祉学部卒業。法政大学大学院修了（経済学修士、政治学博士）。新宿区の地域包括支援センターなど現場の仕事に約13年間従事。社会保障審議会・介護保険部会の委員を4年間務める。現在、淑徳大学総合福祉学部教授（社会保障論、社会福祉学）。介護・福祉関係者にとって大事なものは、「傾聴」を基本とした援助技術の向上と制度・政策への関心を高めること、と教えている。経済学や政治学をベースにしなが、介護と医療を中心とした政策論は政治・経済の社会的背景によって大きく影響を受けるため、常にその動向に関心を抱いている。著書は『介護—現場から検証—』（岩波新書）、『日本の介護システム』（岩波書店）、『孤独死のリアル』（講談社現代新書）など。

山寺 香（毎日新聞記者）

1978年、山梨県生まれ。2003年、毎日新聞社入社。仙台支局、東京本社夕刊編集部、同生活報道部を経て2014年4月からさいたま支局。事件・裁判担当だった同年12月に本事件の裁判員裁判を傍聴し、取材を始める。これまでに犯罪被害者支援や自殺対策、貧困問題などに関心があり取材してきた。著書『誰もボクを見ていない—なぜ17歳の少年は、祖父母を殺害したのか—』（ポプラ社）、共著に『リアル30's"生きづらさ"を理解するために』（毎日新聞出版）がある。1児の母